

## イネ縞葉枯病発病抑制のための投げ込み型の殺虫剤による本田防除

### [要約]

投げ込み型のエトフェンプロックス油剤をヒメトビウンカ第2世代幼虫の本田防除適期に処理すると、イネ縞葉枯病に対する防除効果が高い。

農業総合センター農業研究所

平成30年度

成果  
区分

技術情報

### 1. 背景・ねらい

イネ縞葉枯病（以下縞葉枯病とする）は県西地域を中心に発生の多い状況が続いており、県南地域においても発生が増加傾向にある。本病の対策として、多発生地域では媒介虫であるヒメトビウンカを対象とした殺虫剤の無人ヘリコプターによる本田散布が行われているが、実施できない水田においては省力的な本田防除技術が求められている。そこで、投げ込み型の殺虫剤の防除効果について明らかにする。

### 2. 成果の内容・特徴

- 1) 筑西市の現地圃場において、ヒメトビウンカ第2世代幼虫の本田防除適期にエトフェンプロックス油剤（商品名：なげこみトレボン、以下E油剤とする）を投げ込み処理すると、対照のシラフルオフェン乳剤（商品名：MR. ジョーカーEW）の本田散布と比較してヒメトビウンカ幼虫および縞葉枯病に対する防除効果は同等からやや劣るが、無処理と比較して防除効果は高い（図1）。
- 2) つくば市の現地圃場において、イミダクロプリド粒剤（商品名：アドマイヤーCR箱粒剤）の育苗箱施用に加えて本田防除適期にE油剤を投げ込み処理すると、育苗箱施用単独処理と比較してヒメトビウンカ幼虫および縞葉枯病に対する防除効果は高い（図2）。

### 3. 成果の活用面・留意点

- 1) 本成果は、平成30年に筑西市（品種「コシヒカリ」、5月14日移植、多発生条件）およびつくば市（品種「コシヒカリ」、5月11日移植、少発生条件）において行った試験の結果である。
- 2) ヒメトビウンカ第2世代幼虫の本田防除適期は、幼虫発生開始期から増加期（幼虫発生盛期の始期）である（平成28年度主要成果「イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカ幼虫）に対する本田防除適期」）。
- 3) E油剤は湛水状態の水田に水溶性容器のまま投げ入れて処理することから、省力的である。処理後3～4日は湛水状態を保ち、落水・かけ流しをしない。なお、処理時期は中干しの時期と重なる場合があることから、計画的に作業を進める必要がある。
- 4) E油剤の薬剤費は、無人ヘリコプターによる防除コストと比較して高く、10a当たり3,000円程度である。
- 5) 本技術は、無人ヘリコプターや乗用管理機等による本田散布を行うことができない水田における補完的な本田防除技術である。
- 6) 試験に使用した農薬は、平成31年2月1日現在、水稻に登録のある薬剤である。

#### 4. 具体的データ

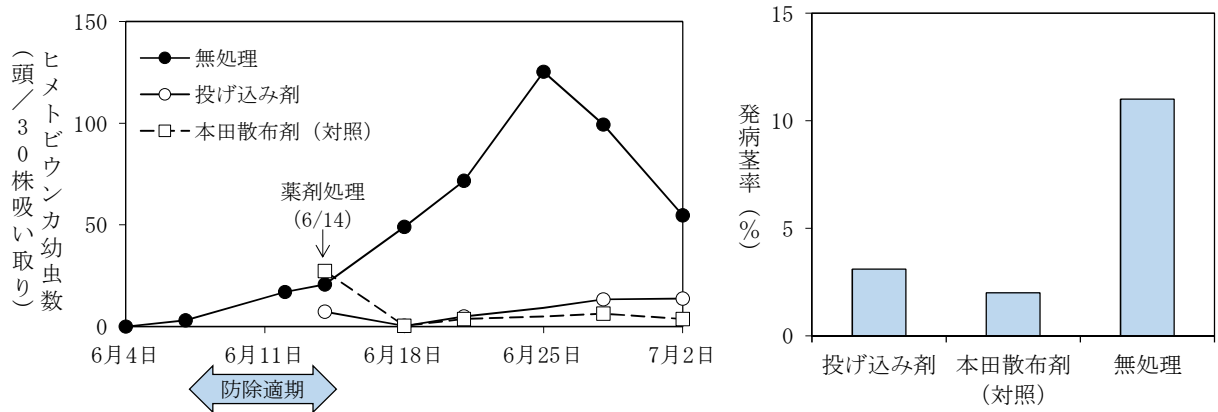


図1 投げ込み型の殺虫剤によるヒメトビウンカ幼虫密度低減効果およびイネ縞葉枯病防除効果（平成30年、筑西市）

- 注1) 投げ込み剤としてエトフェンプロックス油剤を湛水状態の水田（約12a）に均等に処理した。本田散布剤としてシラフルオフエン乳剤を動力噴霧器を用いて散布した。薬剤処理は6月14日に行った。
- 注2) 幼虫数の調査は、バキュームプロアを用いて各区30株×3か所で行った。
- 注3) 防除適期は、ヒメトビウンカの幼虫発生開始期から増加期を示す。
- 注4) 発病茎率は、8月7日に各試験区任意の100株について調査した。

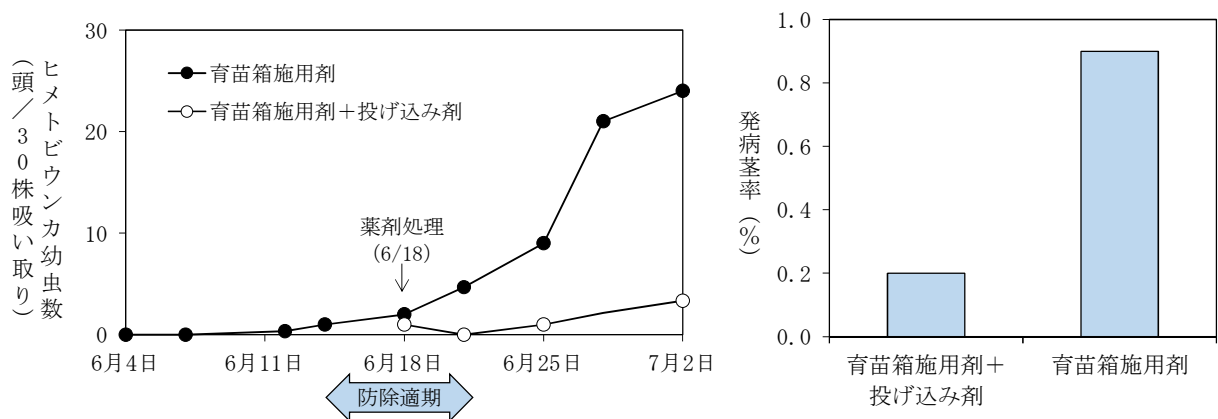


図2 投げ込み型の殺虫剤によるヒメトビウンカ幼虫密度低減効果およびイネ縞葉枯病防除効果（平成30年、つくば市）

- 注1) 育苗箱施用剤としてイミダクロプリド粒剤を播種時に処理し、6月18日に投げ込み剤としてエトフェンプロックス油剤を湛水状態の水田（約9a）に均等に処理した。
- 注2) 幼虫数の調査は、バキュームプロアを用いて各区30株×3か所で行った。
- 注3) 防除適期は、ヒメトビウンカの幼虫発生開始期から増加期を示す。
- 注4) 発病茎率は、8月2日に各試験区任意の100株について調査した。

#### 5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

重要病害虫防除対策強化事業・平成30年度～平成32年度・病虫研究室